



Why I am in JAPAN

[第1回]

創英には多くの海外出身者がいます。そんな彼らが“なぜ日本を選んだのか”そのきっかけを連載形式でご紹介します。
連載第一回は、今やさらに日本を超えてアメリカを拠点にしている鄭弁理士がどうしてまず日本に来ることになったのか…に迫ります!



弁理士 鄭 聖曄

■自己紹介

コンニチハ！創英国際特許法律事務所で日本の弁理士として勤務しております鄭 聖曄(ジョン ソンヨブ)と申します。韓国・ソウル出身で、2001年秋に渡日し、その後14年間、東京と福岡に住みました。2014年からはアメリカのワシントンDCに来て、創英ワシントンDCオフィスで勤務しています。

■初日本

私が日本に初めて来たのは、JICA(独立行政法人 国際協力機構)主催のとあるプログラムに参加するためでした。そのプログラムでは、韓国の大学生25人が1か月間日本の各地を大阪、東京、北海道、広島順に旅行しながら、日本の文化を学び、日本の人と交流することによって、日本の今をより深く理解していきます。そのプログラムは日韓両国間の交流を目的とするため、選ばれた25人の大学生は韓国の伝統にまつわる何らかの特技を持っており、私は1986年にソウルで開かれたアジア大会の開幕式にテコンドーで出場したことが選抜された理由のようでした。東京に滞在した期間中は、日本の大学生25人と2泊3日間合宿しながらお互いについて深く理解する時間を持ちました。日韓両国の過去と現在、そして未来について熱い議論を交わし、当時の日本側の大学生たちとは今も良い友達として仲良くしています。

■再び日本へ

楽しくて目から鱗だった1ヶ月が終わり、ソウルに戻った私は、やはりもう一度日本に行きたいと思い、大学を休学し、6か月間、再び日本に行きました。今度は日本語をしっかりと学びたいと思い、語学学校に通いました。語学留学では、飲んでいてもその言語でしゃべってさえいれば勉強したことになるので、私はとても熱心に勉強をしました。上記25人の日本の大学生のうちベストフレンドになった人の家で居候をして、その時に日本の大学生は麻雀が好きであることを初めて知りました。しかし、麻雀の時はみんな黙っているので、毎晩のように麻雀をしないで、飲み会をしていれば、私の日本語はもっと伸びていたかもしれません。

■三度目の日本

充実した6ヶ月が終わり、またソウルに戻った私は、今度は日本で学問としてちゃんと勉強をしたいと思いました。そして、文部科学省が選抜する国費留学生選抜試験に何とか合格し、2001年9月に三度目の渡りをしました。日本の税金を使わせていただいて大変恐縮ですが、私が知る限り、文部科学省の奨学金は世界で最も大

きい奨学金の一つです。一度奨学生として選ばれると、研修生2年、修士2年、博士3年の計7年間学費がまず全額無料で、更に大学生が十分に生活できるほどの金額の生活費が出ます。日本の政府が税金を使い過ぎているとの声もあるようですが、国費留学生で長年日本で生活した留学生は、勉強後日本に残り長年税金を納める人もいれば、国に戻った人も何らかの形で日本にポジティブな仕事をするので、長い目で見たら日本にとって良いことになるとの声もあります。少なくとも私は、引き続き日本に税金を納めることとします。

■創英との出会い

日本の大学院で音声認識を専門に修士を終え、2004年11月に創英に入りました。入社時の所長の長谷川との面接はとてもユニークなものでした。面接の場で創英に入ることを切実に思っていた私は、自分の長所を一所懸命アピールしました。すなわち、「私は工学系のバックグラウンドがあり、日本語、韓国語、英語が分りますので、御所に入ったら、まずは翻訳スタッフとしてすぐに即戦力として働けます！」とアピールしたところ、所長の長谷川は若干怒り気味で、「君を翻訳スタッフとしては採用しない。夢が小さい。」と言いました。そして、少し落ち込んでいた私に所長は「特許の勉強をしっかりと、弁理士にならないか。であれば、採用する。」と言ってくれました。私はもちろん「はい、特許の勉強をしっかりと、弁理士になります！」と約束し、創英に入所をしたのです。

■面接時の約束を実現

創英に入り、ある程度仕事を覚えた後に、所長との約束を実現するために、弁理士の勉強を始めました。ご存じのように、弁理士試験ではとても難しい日本語の単語が出てくるので、実に変な苦労でした。「酷」、「瑕疵」など、元々難しい単語は、それはそれでもちろん難しいですが、意外と生活で出てくる言葉が分らない時もありました。何年ものかかりましたが、何とか合格して日本の弁理士になれたのは、私の人生で最も運が良かったことの一つと思っています。

■創英ワシントンDCオフィス

創英に入ってほぼ10年が経った頃、居場所をアメリカに移し、2015年には創英ワシントンDCオフィスを開設し、現在に至っています。アメリカにいる間は日本の仲間、友達、情け、親切さ、食べ物などが恋しい日が続きますが、年に3回日本に行くのをいつも楽しみにしながら頑張っています。